

池袋清風の譯詩

小島，吉雄

<https://doi.org/10.15017/2556529>

出版情報：文學研究. 35, pp.171-180, 1946-03-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



池袋清風の譯詩

小 島 吉 雄

明治二十二年一月二十二日發行の國民之友第三十九號に池袋清風の「新體詩批評」といふ一文が出て、それにトマス・グレイの墓畔哀歌の意譯が收められてゐることは、すでに日夏耿之介氏の「明治大正詩史」にもしるされてゐて、有名なことであるが、清風自筆の詠草を見ると、その試みは、早く二十一年四月十九日になされてゐたものゝやうである。自筆詠草は、年代順に歌をしるしたものであるが、その明治二十一年四月十九日の條に「グレイ氏墳上感懷詩を各句意譯せし中に」と題して、

くれわたる野末はるかに聲すなり野かひの牛も今歸る
らむ

賤の男もつかれはてけんしづかにもくるゝ野路を歸り行く見ゆ

あし曳の遠山の端も影消えてくれ行く野邊に立つ人やたれ

野も山もしづまりはてし夕まぐれ淺茅がもとに蟲の音ぞする

といふ四首の短歌と、それにつづけて、これを一つに纏めた

あし曳の 遠山寺の 入りあひの 鐘のひびきは
かへりこぬ 今日の別を 告にけり 野末はるかに
打むれて 野かひの牛の かへり行 聲かすかにも

聞えつゝ 烟をたがへず 賤の男も つかれはてけ

ん とり／＼に 廣き野中を しづ／＼と 家路さ

してぞ 歸りける 眺むる程に 打渡す 遠山の端

も 影消えて くれ行野邊に 我ひとり 立つゝ居

れば ふく風も しづまりはてゝ 草村に むしの

なく音も 聞えつゝ 遠き牧場の ねやにつく 羊

の鈴の音さへも 今はかすかになりにけり

といふ長歌とを載せてゐる。けだし、「新體詩批評」に掲

出した譯は、この自筆詠草に少しく手を加へたものなの

である。すなはち、「くれわたる」の短歌の前に

悲しくてけふもくれぬと告るなりあすかの寺の入相

のかね

といふ歌を、また「野も山も」の歌の次に

羊かふ遠き牧場の鈴の音もかすかになりぬ秋の夕ぐ

れ

といふ一首を添加してをり、また長歌のところどころに

斧正のあとが見られる。たとへば、

眺むる程に 打渡す 遠山の端も 影消えて くれ

行野邊に 我ひとり 立つゝ居れば ふく風も し

づまりはてゝ

を、

なほ立とまり ながむれば 遠山の端も 影消えて

くれ行野べに ふく風も しづまりはてし

としてゐるが如きそれである。原詩に即して眺めても、

はた獨立した一つの詩としての表現修辭から言つても、

改訂せられた方が、よいやうに思はれるのである。

一體、このグレイの墳上感懷詩は、明治十五年に出版

せられた「新體詩抄」に矢田部尙今の翻譯が出てゐるの

であつて、清風はその尙今の譯詩に刺戟せられて筆を執

つたものである。

元來、清風は桂園派の歌人であつた。明治二十年代

の和歌改良運動時代にあつて、京都の同志社の學生を中

心にする青年層への和歌普及を志し、それによつて改良の實をあげようと企てた人であり、桂園派歌風を推進することによつて改良の志が遂げられると信じてゐたところに、彼の特色があつた。「新體詩批評」は、さういふ和

歌改良家團から見た「新體詩抄」評である。彼にはこの外に「和歌概論」「和歌沿革略史」等の歌論がある。これ

ら明治二十一・二年の間に發表した彼の歌論は、尠からず當時の歌界を刺戟するところがあつた。和歌改良家としては、彼は極めて漸進的であり、微溫的であつた。

しかしながら、彼が單なる謬論家でなくして、自家の主張を作品の上で實現しようとする實際家であつたことは注目に値する。清風の家集は、「かかしのや歌集」といふ。明治三十六年七月正宗敦夫氏によつて出版せられたものだが、これは、清風の全面目を示すものではない。

清風には、別に、美濃判紙に丹念に整理淨書した部厚な自筆詠草が數冊ある。「かかしのや歌集」はそれらの數あ

る作品の中から、鎌田正夫、井上通泰諸氏の選をへて抄出編纂せられた。従つて、この集には選者の好みが働いてゐて、清風の特色の半面だけしか現れてゐない。自筆詠草の中には、

野林の奥をやきし、やの通ふらんけぶり一すぢ立ちわ
たる見ゆ

ことわりの暗もなき世となりにけりえ、れきの光が、す
のともし火

といふ風な歌がある。汽車をわざわざ「蒸氣車」と言ひかへて歌によむといふやうな當時にあつて、かういふ風に漢語洋語をそのまま歌に詠み入れることは、大英斷でなければならぬ。また、「まりやくりすとをはらむ」と題して

ゆだや野の淺茅が露に久かたの月の光のやどりける
哉

といふやうなのがある。或は

なめる河芦間の捨子末遂に大あらなみもうち拂ひつ
つ

といふ歌がある。外國の地名をよみこむなどは、當時としては大冒險だつたのである。清風は、また同じころ、新體和歌といふ新風を樹立せむと志してゐる。明治二十一年十月二十二日の條に、

朝のねざめに始めて新體和歌を起さんとおもひ
ける折から

雪はきゆるあたごの峯、水はけぶる廣澤の池、汀の
芦も今漸くもえ、うれしくにほふ初日の光。

また、おなじく十一月二十五日の宵「道すがら又新作長
歌」と題して、

雪は歸る大日枝の峯、月は宿る白川の水、山田の原
に雁鳴渡り、更に故郷を思へば、風いよいよ寒し。
とある。おもふに、清風の志した新體和歌といふのは、
かかる今様風の長歌で、漢詩の絶句から思ひついたもの

らしく、所謂三十一音の短歌とはその趣を異にするものであつたが、彼が何か新しいものを要求してゐた心情はわかる。グレイの墓畔哀歌を和歌に譯したのは、彼がかういふ革新的志氣を抱いてゐたころのことであつた。

清風の英學は、相當に深いものがあつた。もと、彼は日向國都城の産であるが、明治五年二十六歳の二月に郷關を出で鹿児島醫學校に學び、はじめて英書に親しんだ。更に、その後、明治十一年冬頃から、鹿児島に流れ入つた長崎一致派の宣教師について英學を學んでゐる。十二年には京都から新島襄が來歴し同志社精神を宣傳したので、これに共鳴し、翌十三年秋京都に出て同志社の英語課に席を置いた。しかし、病氣のために、十五年の六月に英語課を退いて、九月から神學課に轉じた。かういふ經歷を有する彼であつたから、グレイの原詩について意譯を試み、「新體詩抄」の向ふを張らうといふ氣を起したものと見える。明治十八年九月から同志社女學校に

教鞭をとつてゐた彼は、十九年六月にそれを辭任し、二十一年六月には同志社圖書掛となつてゐるから、このグレイ詩の譯は、女學校をやめてのち浪人時代になつたものである。

「和歌略史」の附論に彼はかういふことを述べてゐる。

曰く、

「詩歌は譯すべからず。詩歌は譯すべき者にあらず。

譯すべきは詩歌にあらず。故に之を譯せんと欲する心既に愚也。詩歌の詩歌たる所以を知らざる也。若し彼

國の或詩の雅味を此國の辭に移さんと欲せば、極めて間接の意譯を用ふべし。蓋し譯とは彼辭を此辭に換ふる也。彼の文體の組織に従ふて直譯と云ひ此の文體の組織に換ふるを翻譯とも云ふべきか。孰れにしても彼の辭句の意味は一も洩さずして此辭に移すべければ也。余が假に所謂意譯とは彼辭の直接の意義を取らず唯其雅味のみを取り之に適する此國の雅言にて別に作

るべし、若し彼辭句と此辭句と意義一致することあらば幸也。」と。

その相譯すべからざる理由は、第一にわが國の和歌をわが國語にてすら譯することが出来ない。たとへば、

若草も今かもゆらん山さとのあれし垣ねに春雨ぞふる

といふ歌を譯して、

草ももうはへでるせう百姓のくづれ垣ねに雨がふります

といひ、

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

を、

うそことをぬかさぬ世ならどの位人の言葉が愉快だらうか

とせば、これ全く和歌ではない。唯意味を譯しただけで

ある。和歌の眼目はただ意味の異同といふ點だけにあるのではない。次に我が國の歌と雅趣甚だ相似たる支那の詩を譯しようとしても、やはり譯することが出来ない。

かういふ風に我が國の和歌も又漢詩も我が國語に譯するを得ない。況してや、風俗人情の大いに異なる歐米の詩を譯することに於てをや。茲に滑稽な一例がある。すな

はち、ある日本語に通じた米國人自ら讚美歌を譯してこれを日本人にうたはせたところ、日本人は抱腹に堪へず、謔ふことが出来なかつた。米人はそれを訝り、吾が譯は毫も誤りなしと言つたといふのである。英語で「カム、ツー、ヂージュス、カム、ツー、ヂージュス」、と言つて歌つても、英米人に少しも鄙俗な感じを起させない。然し、右米人の譯は、

「イエースに御出で、イエースに御出で」
または、これを換へて、

「イエースに來いよ、イエースに來いよ」

といふのである。いづれにしても、滑稽となり、とても高尚幽雅の感は生じないのである。——かういふ風に述べて來て、清風は最後に、かう言つてゐる。

「近來歐米の詩を譯せんと企望する者あり。亦彼詩の風體に倣ひ日本語にて作らんと試みる者あり。然るに之を譯するは前に述べし如く直譯は更也、翻譯と稱するをも用ふる能はざれば、最間接の意譯を求むべし。之に就て先づ心得べきは、歐米の詩は彼地にて著名なる文雅の詩人、古來の詩を味ひ、亦一般の人情を觀、之に最も適切なる趣向と清雅幽美なる辭句を選び思を凝し心を碎き、詩成れば已先づ之を一讀して三嘆の感情發すべき位の者を始めて出版し、國民亦之に感ずる事也。自ら感ぜざる詩を出して國民豈之に感ぜんや。國民感ぜずして如何で世に行はれんや。是に於て之を譯せんと欲する者は必ず先づ古來の和歌を詠じ、能く其雅味詠法を知り我が國の

人情に適切なる事柄を我が國の高雅優美なる辭句を用ひて間接に彼雅味を譯し、譯成れば先づ自ら一讀三嘆の感情あるが如きを始めて公に發行すべき也。是則歐米詩の活きたる譯なるべし。彼詩の風體に倣ひ、更に我が國語を以て長歌等を作らんと欲するも亦同じ。」

かくの如きは、彼が英詩翻譯の態度であつた。「新體詩批評」にも亦同様の趣旨を繰り返し述べてゐる。「和歌略史」は、明治二十一年八月に發表せられたものである。

抑々グレイの暮畔哀歌の原文は、どういふものであつたらうか。また、その譯詩との關係はどうであつたらうか。清風の譯したのは、最初の二聯だけである。

清風の譯を「新體詩抄」のそれと比較してみると、清風の方には、原文にないさまざまな語が加へられてゐて「新體詩抄」のよりは遙かに長いものとなつてゐる。殊に、

長歌の方よりも短歌の方にそれが一層甚しいやうである。また、原文には「虫の羽音」とあるところを、清風は「秋の叢に鳴く虫の音」に變へてしまつてゐる。「新體詩抄」の方は原文のとほりである。してみると、翻譯としては「新體詩抄」の方が原文に忠實であるといふことか出來さうである。清風の「新體詩批評」によれば、寂寥悲愁の感は秋野の蟲聲に如くはない。飛ぶ羽音などでは、到底その感じが出せない。だから、かういふ時は原詩の辭句に抱泥せず、物寂しいといふテストを取つて譯すべきだといふのである。清風のねらひは、原詩の情趣を日本流に表はさうといふにある。英語どほりに短かく譯する時は唯意味の死骨のみで、詩歌ではない、詩歌の體とするには、日本語の雅語を挿入し、感情の生肉をつけなければならぬといふので、原詩にない語を補つたり、虫の羽音を虫の鳴く音に變更するといふやうな大膽をさへ敢へてしてゐるのである。「新體詩抄」の譯を見る

と、起句に、

山々かすみいり合の

鐘はなりつつ野の牛は

徐かに歩み歸り行く

とある。すなはち、ここでは、春の夕景として譯筆が選ばれてゐる。清風の場合は、今も述べたとほり秋夕の情景である。尤も、原詩には、明確に季節を指示してゐない。しかし、グレイがこの詩を作る環境におかれたのは一七四二年の夏以來であり、そしてその詩の出來たのはその秋だと言はれてゐるから、この詩の描くところが彼の矚目そのままだったとすれば、「山々かすみ」は原詩から遙かに遠ざかつた譯筆と言はねばならぬ。清風は原詩の製作時期まで調査したわけでないが、彼の詩人的感覺が「新體詩抄」の譯者よりも遙かに原詩に近い情景を嗅ぎあてたわけである。

譯は短歌に於けるよりも長歌の方に於て、原詩に忠實

である。「parting day」を「かへり來ぬ今日の別れを」と譯し生かしたところを見ると、「新體詩抄」よりも原詩にすつと忠實であつたと言つてよいかも知れぬ。短歌の方では、

悲しくてけふも暮れぬと告ぐるなりあすかの寺の入

相のかね

と譯して、奔放な意譯となつてゐるが、それでも、物舊りた田舎寺の寥園氣を出すには飛鳥寺はふさはしいものであるし、「the knell of parting day」に含まれてゐる哀愁感を導き出して初句に「悲しくて」と置いたとみれば、やはり原詩の氣分を捉へてゐると言ふことが出来る。ただ原詩の第一聯の終りの一句と第二聯の最初の二句とを一つにして長歌では「なほ立ちとまり眺むれば、遠山の端も影消えてくれ行く野べにふく風もしづまりはてて」と譯し、短歌では、第一聯の終句と第二聯の初句とを一つにして

あし曳の遠山の端も影消えてくれゆく野べに立つ人
やたれ

と言ひ、第二聯の第二句と第三句とを一つにして

野も川もしづまりはてし夕まぐれ淺茅がもとに虫の
音ぞする

と續けてゐる。場合によれば、原詩の一句を二句三句にも
伸ばし、また原詩の二句を一句にするやうなことも必要
であるといふ「新體詩批評」に於ける彼の主張がこゝで
實踐せられてゐるわけである。翻譯家としての清風の力
量を品衡することについては、わたくしはその任ではな
い。しかし、明治二十年前後といふ時代と清風の翻譯ぶ
りとを併せ考へるとき、清風のこのグレイの詩の翻譯は
相當高く買はれるべきものであらうと、専門家でないわ
たくしにも思へるのである。

さて、これらの譯を一つの獨立した作品としてみた
ときの價值から言へば、長歌の方には冗長な點もあり、措

辭に稚拙なところもあつて、なほ斧正すべき個所あるを
思ふのであるが、短歌の方は、さすがに表現がすぐれて
をり、これを當時の一般作品と比較すると、その想も辭
もともに時流を抜く清新味を有してゐるのであつて、後
年、雜誌「めさまし草」に發表して、その雅潤にして而
も新鮮なる點で耳目を聳てしめた佐佐木信綱の譚詩的短
歌の先驅をなすものといふことが出来る。

暮畔哀歌の翻譯は、畢竟、清風が新しきものを生まう
とする試みの一つであつて、清風の和歌改良への意欲を
物語つてゐるのである。しかし、かういふ改良意欲があ
り、その試みに相當の手腕を見せたにかかはらず、結局
から見れば桂園派歌風を脱却し得ず革新歌風をも新體
歌をも樹立し得なかつたのである。殊に、明治二十九年
八月郷里都城に歸つてからは全く往年の意氣なく、守舊
派の一員に甘んじきつてしまつた。それは、彼が既成の
短歌手法に中毒してをり、従つてそのために彼の感情内

容が制縛せられたがためである。一と頃流行した言葉を借りて言へば、自己を清算し舊穀を揚棄しきれなかつたわけである。罪は若き日の彼の教養に歸せられねばならない。

清風は明治三十三年七月二十五日五十四歳で死んだ。